

はしがき

宮治一雄

衣服は、人間にとつても身近な環境であり、外界つまりより大きな環境との関係を媒介する。環境をさらに自然環境、社会環境、経済環境の三つに分けると、衣服をめぐる三つの問題群がうかがはてくる。

第一に自然環境との関係では、衣服を「着る」のは、暑さをしのぎ、寒さを防ぐための工夫である。気候・風土に応じて、独自の素材を用いた独特のスタイルの衣服・民族衣装が世界各地にみられる。近代以降、世界のどの地域でも服装の西欧化が進んだが、現在では風俗のグローバル化とエスニック回帰の同時並行的な進行という現象が顕著になった。つまり、流行となると世界のどこでも同じような服装が広がる一方で、民族衣装の良さがふたたび見直されて若者たちが祖父母世代が着た衣装を着て出歩くようになった。その一方で、冷房が普及したために、蒸し暑い夏にふさわしい開襟シャツを捨てて、背広・ネクタイ姿で通勤するようになった日本のサラリーマンのよ

うな例もある。生活様式の変化や技術進歩によって、人々は自然環境の制約からどの程度自由に服装を選ぶようになったのだろうか。

第二に社会環境との関係では、衣服を「着る」のは、身体を見せるため、あるいは隠すための工夫である。所変われば品変わるというが、衣服についての社会的規範、TPOにも大きな差異がある。さらにいえば民族集団、社会階層、都市・農村、男女・年齢によって、ファッションや服装をめぐるタブーのあり方はさまざまである。外来服と民族服の「着分け」のパターン、仕事着とくに制服（労働服・通学服）から家庭での普段着への「着替え」のあり方も千差万別だろう。日本のサラリーマンや労働者が家に帰るとドテラや浴衣に着替える習慣はおそらく過去のものになっただろうが、高校生たちや学生服やセーラー服をロッカーに置いて私服で盛り場に出かける。さらには文化大革命と人民服、イスラム化とヴェールのように、社会意識や政治状況との関連も大きいに違いない。人民服を着ないために反革命分子とされて苦役を科せられた例や、ヴェールをまとわない女性が職場を奪われたりする例は発展途上国に限られているように思えるかもしれないが、日本でも民族衣装を着て通学するだけでいやがらせの対象になるような例が残念ながら跡を絶たない。社会環境の変化と人々の行動様式の関係は、服装を手がかりと

することによってどのように読み取れるのだろうか。

第三に経済環境との関係では、衣服を「着る」ためには、「作る」か「買う」か、しなければならない。現在の日本では衣服を新調するとなると、ほとんどの人がデパートや専門店に既製服を買いに行くだろうが、布地を買ってきて洋服や和服に仕立てたり、家庭内で糸を紡ぎ布を織ることから始めるのがあたりまえだった時代はそう遠くない。発展途上国の人々は、どのように衣服を調達しているのだろうか。布地や既製服を「買う」としても、マーケットやデパート・ブティックか、時には国外にまで買い出しに出かけることもあるだろう。さらには家族の中で誰が選び、誰が支払うかという問題もある。繊維産業と流通機構の発達とともに、女性の就労・失業など現金収入の増減によって、衣服をめぐる消費者行動はどのように変化していくのだろうか。

本書では三四の国・地域を取り上げているが、以上の三つの問題群から執筆者の関心と対象地域の現実からみて、それぞれの意味で象徴的な題材を扱うことにした。共編者大岩川が「あとがき」で述べているように、晴れ着は対象外とするよう申し合わせた。全編を一気に読み通すというよりも読者の好みにかなう章を拾い読みしていただければよいが、それでも欧米や日本に

も共通する傾向とともに、第三世界のなかでもそれぞれに多様な状況と時代による変化の諸相が読み取れるのではないかと自負している。この点について多くの読者に紙上旅行を楽しんでいただければ、アジア経済研究所における地域研究の成果の一端を示すという「第三世界のくらし」シリーズのねらいが果たされたことになる。

(みやじ かずお／広報部長)